



Title	身体障害者の芸術表現を支える場に出会って
Author(s)	小泉, 朝未
Citation	未来共生学. 2016, 3, p. 453-455
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56250
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

身体障害者の 芸術表現を支える場に出会って

小泉 朝未

大阪大学大学院文学研究科博士前期課程

わたしはダンスや身体表現に興味を持つうちに、さまざまな身体のありようが気になるようになった。自分自身の身体の状態、ダンサーはどのような身体をしているのか、踊らない人は、老人は、障害者は……このような興味のもとで出会ったのが、劇団態変のひとだった。劇団態変では、麻痺や、四肢欠損などさまざまな身体的特徴をもつとされる身体障害者が、自らの障害を身体表現として舞台でさらけ出す。障害者の自立生活運動を進めてきた、自身も小児ポリオの麻痺を持つ金満里が作り上げた芸術集団である。わたしはそこで黒子という仕事をしている。はじめは彼らだけでさまざまな場で公演を行っていたが、障害の特性として文字通り舞台上がるという行為にも、困難が多い。パフォーマーの芸術表現が最大限可能となるように、舞台に出るまでの行程、舞台裏での移動、衣装着せなどの介助をする健常者のスタッフとして黒子が生まれた。

パフォーマーは、身ひとつで床面に寝たり、座り込んだりしてそこから舞台へ這って行ったり、転がったりする。身体の形があらわになり、外観から身体のねじれ、でっぱり、こわばり、弛緩などがうかがえる。四つんばいで這って舞台の中央まで出て行くということにも長い時間がかかるが、一つ一つの動きが表現になっていく。

このような身体障害者の芸術表現をする場があり続けるべき理由はなんだろうか。この問いに対して、障害者の存在価値、芸術の価値、社会包摂の機能といった側面から議論ができるだろう。それに対し

て、わたしは1年にわたる黒子の経験から考えたい。この問いは健常者とされてきたわたしと障害者が、いかに共生するかということにも関わっている。このエッセイで、あえて障害という表現を使うのは、マジョリティの側から障害を持つとされる人々を分離・排除しようとする動きがなくなっていないことに自覚的であるためだ。

黒子としての経験は、おもにパフォーマーとの関係作りの基礎となる稽古場が中心になる。身体表現を追求する稽古場では、日常の介助とは違い、わたしは彼らのさまざまな身体とダイレクトに向き合う。身体の特性を考えながら、歩行を手伝ったり、抱えて場所を移動してもらったりする。

普段の生活でわたしたちは、身体よりも「道具」を介して他者に接することのほうが多い。障害の有無に関わらず、衣類、交通機関といった身の周りの道具と関わることなく何かをなすことはできない。こうした道具は、逆にわたしたちの身体の使い方を規定するという側面も持つ。その道具に対して、規定された身体の使い方ができない身体障害者は介助を必要とする。

しかし生活空間とは異なる劇団の稽古場では、パフォーマーの道具を介さない生身の身体表現をじっと見つめ、黒子として大半の時間を働くことになる。それは日常の習慣・規範に沿うことのない身体に出会うことである。固まったひざ関節のまま繰り出される一歩。腕のない肩が空を切る。道具を前に、身体を「できる・できない」「動ける・動けない」と二分して判断することはなくなる。パフォーマーはそれぞれの身体がもつ差異を意識し、そのなかで動きを展開する。その結果、パフォーマーを見る者はその差異を自然に尊重することができる。何かの基準をもってその動きを判断し、感情で反応するということとはなくなり、「大変そうな動きをしているから手助けしよう」といった感情は置いて、身体表現を支えるための行為に集中できる。どうすればうまく表現活動の助けになるのか、次の行動を考えるのである。

パフォーマーの表現中に「大変そうだ」というような感情を抱かないといっても、そのような感情が全くないというわけではない。稽

古で休憩に入れば、さっさと各パフォーマーのペットボトルを取りにいき、ふたを開けて手渡す。彼らがペットボトルを開ければ、握力が弱いために、開けられないかもしれないと予測して、大変だろうから、健常者として動けるわたしが代わりに開けようと思う。ペットボトルを開けるのを「大変そうだな」と思うわたしの感情は、ふたを開けるという行為を生み出す。感情が原動力となって、行為を生み出す側面は否定できない。

もしもパフォーマーとの出会いがまずペットボトルを開けられないという姿で、その後身体と向き合う場がなければ、どうなるだろうか。「大変そうだな」という感情を抱いたとして、そのあと手助けしていいのか、助ける必要は無いのかといったためらい、後ろめたさを感じて、障害者の存在を意識することを避けるようになっていたかもしれない。

実際に、黒子を始めた当初は、どこまで何をすればよいのかわからず、ひたすら稽古の場にいることに緊張したり、パフォーマーと関わりをどう持てばいいのかわからないと思っていた。行為を生み出す契機をつかめないでいた。まず彼らと稽古場で会うことで、徐々に話ができるようになったり、障害のことを知ったりするようになる。これに加えて身体自体の面白さというものに出会っていなければ、否定的な感情から脱することが難しくなり、積極的に関わりあうための行為を生み出すことができなくなっていただろう。

感情のレベルではなく、身体障害とされる固有な身体を知り、表現に向き合い、実際の行為によって彼らの表現を支える機会を持つということが、劇団態変の芸術表現を黒子として手伝うということだ。障害者を支援するといった感情や理論を超えて、行為で芸術表現を支えようとする黒子という仕事は、わたしが共生や弱者について考えるときの基礎となる現場である。わたしたちが異なる他者に接するときのためらい、衝撃といった感情に埋没するのではなく、必要な行為を生み出し、障害者・健常者の新たな関係性を作ることができる。このように、劇団と関わることで体感する変化を考え続けたい。